

「サロマ湖の変化」の指導記録

〔昭和62年度 豊郷小学校5年〕

(1) 言葉を正確に読むこと
↳ 『この文章は、おかしい!』↳

二学期始めの教材、『サロマ湖の変化』に取組んでいる。夏休みに読んだ青木幹勇氏の「書きながら読む」という実践に触発されて、この教材では視写と書込みの勉強をしようと思っている。一段落ぐらいをノートに視写しては、その文章を読んで読取ったこと、想像したこと、疑問などを書きこんでいく作業を中心に進めてみている。その中でこんなことがあつた。

■ 一段落を板書。子どもたちはノートに視写。

【教材文】

四月の雪解けのころになると、サロマ湖岸の村では、きまつて、大変なさわぎがもちあがりました。雪解けの水が湖からあふれて、岸の人家が水びたしになってしまうのです。

早く書き上げた子には、もう一度読みなおさせたりして、全員がそろうまで待ったあと、二人ほどに朗読させた。そのあと

「この文章を読んで、分かったこと、思ったこと、疑問、なんでもいいから行間に書込みしてごらん。」

と言って5分ばかり時間をとった。

「何書いたらいいのかわからん。」

という声があちこちから出ていたが、かまわず、「何でもいいから書いてみ」と言ってやらせた。しばらく待って、とにかく書いたことを出させた。

智子「『大変なさわぎがもちあがりました。』て書いたんだけどそのわけが次に書いたる。」

T そう、大事なこと見つけたね。

大変なさわぎ

(わけ)

雪解けの水が湖からあふれて、岸の人家が水びたしになってしまうのです。

「こんなふうに線でかこんでおくといいね。」

裕幸 ここらへんでは、雪解けの水でそんなことならへんけど、北海道やでそうなるんかなあ。

T そういうことを読んで思ったんやね。じゃそのことを行間に書いとけばいい。

そんなふうにはまだ書きかたが分らない子もいるので、そのやり方を教えながら、出させていたらおもしろい問題が出てきた。

大輔 『きまってる』のところで、いつも水があふれるんやで、もう慣れてる。

T 『きまってる』に目をつけたのはすごい。こういう言葉にひっかかれるようになるといいね。『きまってる』に書きこみした人、ほかにある？

美豊子 『きまってる』だから、毎年起こるんだな

T いいね。『きまってる』だから、毎年湖から水があふれてるんだ。そして、毎年のことだから、村の人たちはもうなれてるんだ。そういうこと言ってるんだね。

するとここで、「それはおかしい」という声があくつも上がった。

和幸 毎年水があふれるのやったら、大騒ぎするなんておかしいのとちがう。

C もう慣れてるんやったら、大さわぎなんかしいひん。

力 洪水がくるてわかつたるんやで、準備しといたらいのに。

子どもたちの疑問を聞きながら、もう一度文章をよく読んでみた。たしかに、『きまってる』大変なさわぎがもちあがりました。』という言いかたはおかしい。『大変なさわぎ』というのは、突発的に起こった事件の場合に使う言葉である。その時はっと思いだした。この教科書の文章は、改作されていることを。

夏休み、少し教材解釈をしておこうと思って、『サロマ湖の変化』を読んだ。この教材は前にも扱ったことがあるのだが、なんとなく文章の感じがちがうので前の教科書と比べてみたらかなり大きく改作されていることがわかった。教師用指導書には

『六十一年度版の編集にあたり、筆者の意図を明確にし、児童の学習を容易にするため、文章構成や表現を改修してある。』

と書いてあった。確かに前作と比べると全体的にはすっきりした文章になっているとその時は思った。だが、子どもたちの疑問を聞きながら、やはりこの改作は、『改悪』だったことに気がついた。改作前の文章は次のようになっていた。

①昭和四年四月の雪解けのころでした。サロマ湖岸の村では、たいへんなさわぎが持ちあがりました。雪解けの水が湖岸らあふれて湖岸の人家が水びたしになり始めたからです

②サロマ湖といっても知っている人は少ないでしょうが、北海道のオホーツク海に面した海岸にある湖です。このあたりには、小ささまざまの湖がありますが、サロマ湖は、そのうちでもいちばん大きく、周囲は約九十キロメートル、面積は約百五十平方キロメートルもあります。

③この湖と海の境には、細長い砂丘が続いています。もとは、この砂丘のひがしはしにせまい口があって、湖と海が通じていました。ここを「アイヌ人は、「トウフツ」と言っていました・アイヌ語で「トウ」は湖、「フツ」は口のことですから、「トウフツ」は「湖の口」という意味です。

④このトウフツは地図を見ればわかるように、曲がりくねった形をしています。それで、毎年、秋になると、しけのために海からおし流されてくるどろや砂でうずめられ、

□をどじてしまします。そして、春になっても、ひとりでに□が開かないので、湖の水位は、雪解けの水で、どんどん高くなってしまします。これが、毎年、春の大水の原因となっていました。大水になると、付近の家も畑も、すっかり水びたしになってしまします。ですから、村の人々は、みんなで力を合わせてトウフツを切り開き、湖の水が海に流れ出るようにしていました。

⑤ところが、その年に限って、作業はなかなかうまくいきませんでした。いつもならちよつとせまい水路をあげると、あふれるばかりにたまっていた湖の水が、勢いよく流れ出ていき、その水の勢いで、トウフツは、いつそう深くえぐられるのです。しかし、その年はどうしたものか、なんとしてもうまく口をあげられませんでした。そういうしているうちに、湖面はますますたかくなってきたのです。

—以下略—

改作前の文章もあまりよいものではないが、「たいへんなさわぎ」の言葉は、文脈の中にきちんと位置づいている。今更ながら子どもたちの読みの鋭さに驚かされる。

結局、一つ一つの言葉に関わりながら丁寧に読むことで、いろんな問題が発見でき、結果として「読む力」も育っていくのだと思う。

(2) 『説明文を書く試み』

『サロマ湖の変化』は、説明文としては、そうおもしろいものではない。だが、文章全体の構成は、大変わかりやすくなっている。特に次のような部分は、段落相互の関係がはっきり見える。

【『サロマ湖の変化』の教材文】

—略—

新しい口が砂丘の一角にできたことよって、春先のこう水による災害がなくなりました。そればかりか、このことは、サロマ湖やその付近の村の生活にも、大きな変化を起こすきっかけとなったのです。

まず第一に、「トウフツ」に口があつたころには、地図で見ると、水路が細長く曲がりくねった複雑な形をしていました。—略—

つまり、水の動きが前よりも自由になったので、トウフツ付近によどみがちだつたきたない水がなくなつてしまつたのです。

第二には、湖の塩分のこさがぐんと増してきて、湖の水の成分が海水に近くなつたことです。—略—

第三には、湖の底には、いたる所に、真黒な、いやなおいのするどろがあつたのです。それが海に流されて、なくなつてしましました。

第四には、サロマ湖には、春になると、にしがトウフツの付近に少しは、入つてきていたのですが、湖のまん中までは決してやってきませんでした。ところが、新しい口ができてからは、にしが湖の中をどこでも自由に泳ぎ回り、たまごを産むようになったのです。—略—

第五には、それまでさかんであつたかき貝の漁がおとろえてきたことです。—略—

第六には、トウフツの口がとじてしまつたので、オホーツク海とサロマ湖

をぶたいとして漁業を営んでいた、トウフツの付近に住む人々は、しだいに減っていき、それとは逆に、新しい口のそばの三里番屋とよばれている所に町ができて始めたのです。

このように、サロマ湖の海に通じる水路が変わったことで、湖岸に住む人々は、春先のこう水から救われ、湖のありさまやその付近の村にも、大きな変化が起こりました。

こうしたさまざまの変化を考えると、自然の力とそれにはたらきかける人間との、深いつながりを考えずにはいられません

サロマ湖に新しい口を作ったことで、いろんな変化が起こったことを整理して、分りやすくまとめている。だから、この教材では段落と段落の関係をとらえる力を育てることをめあてにして取組んだのだが、単に読解の学習で終わらずに、さらにこの構成を使って「説明文を書く」という試みをやりたいと思った。

今まで子どもたちには生活作文は何度か書かせているが説明的文章の作文は書かせたことがない。自分の直接体験を書くのに比べると、ある事象を客観的にかつ論理的に書くのは格段にむずかしい仕事だからである。

でも、もう五年生なのだから初歩的な説明的文章を書く勉強があってもよいのではないか、そういう力も育てていくべきではないかと思っただけで試みることにしたのだ。また、この文章のスタイルを生かせるような題材を選べば、基本的なところはこの文章をまねればよいのだから、そう困難な学習にもなるまいという見通しもあった。

■ 取組みの実際

1 題材を考える

五時間ばかりかけて、本文の読解を終えたあと、子どもたちに「こんどはみんなにもこういう説明文を書いてもらう。『サロマ湖の変化』のように、何かをきっかけにしていろんな変化が起こった、というようなできごとを見つけてこよう」という宿題を出した。

次の国語の時間、発表してもらったのだが、大半の子は、題材が見つからないままだった。やはり、子どもたちには私が思うほど簡単な仕事ではなかったのだ。でも、何人かは考えてきたので、とりあえずそれを発表させてみた。

・『瀬田川の洗いぜき』 真ひと

瀬田川に洗いぜきができたことで、びわ湖や、下流の人々のくらしにいろんな変化がおこった。

・『木』 美希

木がたくさん切られて、鳥がいなくなったり、空気がきたなくなったりしている

真ひとや美希は私の要求に応えた題材を見付けてきた。真ひとのなどは、サロマ湖の変化をそのまま生かせるような題材だった。だが、その他に出てきたのは、「〇〇の変化」を「〇〇の歴史」という意味にとらえているようなものばかりだった。これではどの子にも書かせることができないので、こちらから、いくつか例をだしてやった。

「車なんかはおもしろいね。車ができたことによって、みんなのくらしはずいぶん便利になったでしょう。」

となげかけて、みんなから車がなかったころの生活と比べてどんなことが変わっているか出させ

た。

また、テレビもおとなや子どものくらしをずいぶん変えたことを紹介してやったりした。

2 構想から下書きへ

そういう話合いの後、一人ひとりが書いてみたい題材と、その内容についてノートにメモさせた。子どもたちの選んだ題材は「車と私たちのくらし」「テレビと子どものくらし」がやはり多かったが、暢子のように「学校の変化」というような自分で考えた題材の子もいた。

次の時間、特に多かった「車」と「テレビ」について、子どもたちのノートにメモしてあった変化をプリントにしてやり、書くときの参考にさせた。また、いきなり書けといっても大半の子は書けないにきまっているので、書きだしの例、まどめの例も書いてやり、それを参考にするようさせた。書けない子はそのまま書きだしの文章を写しても良いと言ってやった。今回は、こういう形の文章を書いてみるのが目的だから、まねでも良いと思ったのである。

【プリント】

みんなの考えた題材

◎ 「車と私たちのくらし」

- ★車ができたことによって
- ① 遠い所にもすぐ行ける。
 - ② 仕事も遠いところに速く行けるようになった。

- ③ 道を広げる工事が行われた。
- ④ がたがた道がアスファルトに変わった。
- ⑤ 交通事故が多くなった。
- ⑥ 空気がきたなくなった。
- ⑦ 車をとめる場所がないところにはあまり人が行かないのでさびれてきた。
- ⑧ 車を買うのにお金がいる。ガソリンを使うのでお金がいる。
- ⑨ 道が車ばかり通るようになった。

◎ 「テレビと子どものくらし」

- ★テレビができたことによって
- ① 今日あった事件がすぐにわかるようになった。
 - ② 目の前で見ているようにわかる。
 - ③ いろいろな情報がわかる。
 - ④ テレビを使ってゲームもできるようになった。
 - ⑤ 子どもが外で遊ぶばなくなった。
 - ⑥ 目の悪い子が増えてきた。

◎どんなふうに書いていけばよいか

①書き出し

くそれができるまでのくらしのようすはどんなであったか

まだ、テレビというものがなかったころ……

私たちのおじいさんおばあさんが子どもだったころ、車などはありませんでした。そのころの人々は……

テレビが私たちの家に入ってきたのは昭和三十五年ぐらいからです。ちょうどお父さんやお母さんが小学生のころでした。テレビが入ってくるまでの子どもたちのくらしは……

自動車というものを初めて作ったのは、アメリカのフォードという人で、今から約百年前のむことでした。自動車ができるまでの交通といえは……

②中心の説明

くそれができたことよってみんなのくらしがどう変化したのか

テレビが家の中に入ってきたことよって、子どもたちのくらしは、ずいぶんかわってしまいました。

第一に……

第二に……

車ができることよって、わたしたちのくらしに大きな変化があらわれてきました。

第一に……

第二に……

③全体のまとめ

く「私が言いたいこと」を書く

このようにテレビは子どもたちのくらしをすっかり変えてしまいました。こうしたさまざまの変化を考えると、……ということを考えずにはいられません。

このように車ができたことで私たちのくらしには大きな変化が起きました。こうしたさまざまな変化を考えると、……を考えずにはいられません。

そうして、下書きの途中の段階で、友達がどんな書きだしをしているか、どんなふうに変化のようすを書きすすめているか、参考になりそうなものをプリントしてやって話合いも入れた。こうした過程をくぐって清書させた。

3 子どもたちの書いた説明文

「車と私たちのくらし」 智子

自動車というものを初めて作ったのは、アメリカのフォードという人で、今から約百年前のことでした。

自動車ができるまでの交通といえば人力車です。人力車というものは明治時代に使われていた車です。人力車といっても今のようにガソリンで走っている車ではありません。人が引っぱって進ませるのです。それで、遠くへ行くといっても、今のようにならなくへは行けませんでした。

ところが、今から約百年前のことです。アメリカのフォードという人が自動車を作り始めのです。自動車ができてから私たちの生活にも大きな変化が起こり

ました。

第一に遠い所でも遠く行けるようになりました。例えば、昔なら親せきの家へ行くのに遠い所ならだいたいぶんかかり、おぼんやおそろ式など特別な用事しか行けなかったのが、今になると遠い所でも2時間ぐらいでつけるようになったことです。つまり、特別な用事じゃなくてもすぐ行けるようになったのです。

第二に、道を広げる工事が行われました。これは、がたがた道がアスファルトに変わったという事で、仕事の通勤が楽になったのです。

第三に、昔ならつとめに行くのでも、近くしか行けなかったのが、自動車というものができてから遠くでも早くつとめにいけるようになったのです。

このように、車ができたことによって便利になったことは確かですが、それは逆に次のような事も起こっています。

第一に交通事故が多くなった事です。特に大阪や東京などの都会での交通事故は大変多いのです。テレビなどでもよく言われていますが、ほとんどだけがをしたり死んでしまったりしているのは交通事故が原因でした。

第二には、車のはい気ガスによって空気がよごれてきたことです。昔はもつとすみきっていたのですが現在ではものすごくよごれているのです。

このように便利になってきている事もあります。それ以上に私たちが苦しめている交通事故などもしだいにふえていつているのです。

こうしたさまざまな変化を考える時、車にたよっている私たちの交通を考え直すにはいられません。

「車と私たちの暮らし」 亜紀子

私たちのおじいさん、おばあさんが子どもだったころ、車などはありませんでした。

そのころの人々は出かける時、馬車や自転車で رفتり歩いて言ったりしていました。

道でも、今は工事をして広くなっていますが、昔は馬車が一台通れるぐらいの広さでした。

自動車というものを初めて作ったのは、アメリカのフォードという人で、今から約百年前のことでした。

車ができたことよって私たちのくらしに大きな変化が現れてきました。

まず第一に、車がなかったころは、あまり遠い所へは行けませんでした。しかし、車ができてからは、滋賀県から岐阜県、長野県と楽々行けるようになりました。

第二に、道が広くなったことです。今の道は昔の数倍も広くなっています。

第三に、がたがた道がアスファルトになったことです。

このようなことは便利になります、次のようなことはどうでしょう。

第一に、昔ではまったくなかった交通事故が今は二人に一人は交通事故にあっています。

第二、緑がこわされたことです。それは、道や駐車場を作るのに多くの緑がこわされています。

第三に、はい気ガスによって空気が悪くなったことです。

このように、車ができたことよって、私たちのくらしには大きな変化が起きました。

こうしたさまざまの変化を考えると、車の便利さばかりでなく、それに対しての問題を考えずにはいられません。

「テレビと子どもの暮らし」 保

テレビが私たちの家に入ってきたのは、昭和三十五年ぐらいからです。ちょうどお父さんやお母さんが小学生の頃でした。

テレビが入ってくるまでの子どもたちは、外で竹馬や竹とんぼなどを作って遊んでいました。

どこの家にもテレビがあるようになってから子どもたちのくらしはずいぶん変わってしまいました。

第一に、子どもたちがテレビに熱中して外で遊ばなくなってきました。

第二に、テレビを見てばかりなので芽が悪くなってきました。

第三に、おもしろい番組があるので夜遅くまで起きるようになりました。

このように、テレビは子どもたちのくらしをすっかり変えてしまいました。

こうしたさまざまの変化を考えると、子どもたちのけんこうを考えずにはいられません。

「テレビと子どもの暮らし」

和美

テレビがなかったころは、友だちといっしょに手つなぎや、たかたかや、かくれんぼや、色つきおにごっこなど、いろいろ外で遊んでいた。友だちと自転車でおかしを買いにいたりしたり、友だちの家に行ったりしていた。

ところが、どこの家にもテレビがあるようになってから、子どもたちのくらは、大きく変わった。

第一に、友だちがきたらファミコンをしたりゲームをするようになった。

第二に、5時ごろになると、外で遊ばなくて、テレビのマンガを見るようになった。

第三に、テレビの前で見たりして目が悪くなったりすることが多くなった。

このように、どの家にもテレビができてから、子どもたちのくらは大きく変わってしまった。

題材、構成、文章の書きかた、どれもよくにっていて、一人ひとりの個性的なものがないのでおもしろみには欠けるが、今回は説明文のスタイルを学ぶということがめあてだからこれでいいと思っている。

しかし、ここまで手を入れてもやはりまだ書く力の弱い数名の子どもたちには、むずかしい作

業だった。この子たちには、やはりもっと基礎的な段階の書く力を育てる仕事が必要だ。